

		昭和		昭和		年月日	第一方面軍司令部略歴
		20		17			
		8	6	5	7	6	通称号 満第五部隊 鋭第一四四八部隊
		9			25	27	
	概要	<p>軍令陸甲第四三号により編成下令 牡丹江省牡丹江市において編成完結 同日より隷下部隊を指揮し、東満地区の防衛に任じた。(編成人員 約六〇〇名) 以後 昭和二十年まで移動しなかつた。 「と」号演習により兵站配置変更準備、これにもなる人員の変動を隷下部隊に指示した。 開戦準備業務遂行と同時に司令部基地設定のため、間島省教化に向け派遣隊編成 日「ソ」開戦とともに全員市内西方高地の特種司令部(戦闘司令部)に移動、空爆をうけたが損害はなかつた。 同夜から三回にわたり、軍用列車により教化に向け後退、(第一、第二回は軍人、軍属、第三回は軍家族)</p>					
	摘要						

1865

昭 20		昭 21		至 自		至 自			
8	8	8	9	8	10	10	9		
28	9	8	8	25	18	9	2		
<p>司令部 大将 喜多 誠一</p> <p>大将 山下 奉文</p>		<p>部隊教化に移動の際、若干の残置員は 松花江より哈爾濱にいたつた。</p> <p>哈爾濱において武装解除</p> <p>武装解除後教化に向かい同地において本隊に合流</p>		<p>吉林出發、コロ島經由帰国</p>		<p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>軍家族（軍人、軍属を若干含む）は守備隊官舎に集結</p> <p>教化出發、吉林付近において越冬</p>		<p>教化（沙河沿）第二四六作業大隊に編入</p> <p>同地出發</p> <p>沙河沿飛行場に移動、同所に収容</p> <p>尉官以下は守備隊内において作業大隊要員として編入。</p> <p>佐官以上は沙河沿飛行場にいたり、同所より飛行機で入「ソ」</p> <p>停戦を知る。同地において武装解除</p> <p>書類の整理、機密書類の焼却</p> <p>教化着、守備隊（歩兵）兵舎に入り戦闘司令部を設置</p>	

至自					昭	年 月 日	第一二二師団司令部略歴
7	76	5	3	1	概		
15	中下旬	中旬	30	16			
<p>一部は寧安地区の警備のため残留</p> <p>寧安に移駐後その主力は南湖頭において陣地構築</p> <p>興隆残留隊は寧安に移駐</p> <p>一部は興隆に残留同地の警備</p> <p>主力は陣地構築のため興隆出發鏡泊湖南側南湖頭に移駐</p> <p>同日より同地の警備</p> <p>をもつて編成完結</p>					<p>軍令陸甲才九号により編成下令</p> <p>牡丹江市興隆において才四国境守備隊司令部が編成担任となり、才四国境守備隊よりの輸入者を基幹とし、在滿の各部隊よりの編入者（約三〇〇名）をもつて編成完結</p>		<p>通称号 満才四六三部隊 満才九四三部隊 真鶴才一二〇六一部隊</p>
					摘要		

1867

	10	10	9	9	8	8		8	8	8	
	31	29	9	3	21	17		中旬	13	10	
司令官 中将 赤鹿 理	綏芬河經由入「ソ」	同地出發	蘭崗妹尾作業大隊に編入	南湖頭出發	南湖頭において武装解除後一部自由行動となる。	停戦命令受領	南湖頭陣地に復帰	掖河において「ソ」軍の進入を、そ止するため行動したが途中より反転し、	全員南湖頭の主力に合流陣地守備	寧安残留隊は同地出發	日「ソ」開戦

昭 20	年 月 日	
自 5 5 5	3 1	
至 24 23 22	30 16	
<p>軍令陸甲才九号により編成下令 牡丹江省寧安縣液河において才四團境守備才一地区隊よりの転入者と、内地に転用した才一一師団の残置者を基幹として編成完結 同日より同地付近の警備 現地応召者入隊 主力は鏡泊湖南方五道溝に移駐、陣地構築 一部は大尉高森忠雄を長として掖河に残留 同地の警備および初年兵教育に従事するとともにその一部は牡丹江地区の警備</p>		<p>歩兵第二六五連隊略歴 通称号 満才四一四部隊 真鶴才一二〇六二部隊</p>
		<p>概要 摘要</p>

至自		至自											
8	119	9	99	9	9	8	8	8	8	8	8	8	7
18	1711	10	108	7	2	末	20	15	10	9	6	2	
<p>鮮人約二五〇名編入 掖河にありし初年兵の約半数は同地出發 五道溝着、主力に合流し陣地構築 日「ソ」開戦にともない残余の残留隊は掖河出發 五道溝着、主力に合流、陣地守備 停戦 鮮人は現地召集解除 現地応召者は在滿居住地に向け自由行動となつたが一部は後日主力に合流 主力は五道溝に集結し、武装解除をうけ南湖頭↓東京城經由 崗崗飛行場に収容 その主力は崗崗才二八四、才三八五、才二八六作業大隊等に編入 同地出發 綏芬河經由入「ソ」 横道河子の警備に任じていたものは主力に合流せず同地で武装解除をうけ、</p>													

最寄の作業大隊に編入されて入「ソ」

一部東京城警備に任じていたものの約半数は、五道溝の連隊主力に合流したが、半数は東京城憲兵隊と同一行動し入「ソ」

才六中隊は北湖頭において武装解除後蘭崗において主力に合流

才一中隊は八月九日、日「ソ」開戦にともない興隆の警備につき一度帰隊

後再び海浪飛行場の警備につき、八月十三日五道溝の主力に復帰

連隊長 大佐 出村 耐 造

至自		昭 20		年月日			
8	7	7	6	5	5	3	1
上旬	下旬	中旬	22	30	16		
<p>鮮系兵の編入</p> <p>穆稜残留隊は数次に分れ石頭に移駐</p>		<p>連隊本部及一部石頭に移駐</p>		<p>一部は穆稜に残留(約一五〇名) 同地の警備および初年兵の教育</p>		<p>主力は鏡泊湖東南方に移駐し、陣地構築実施中、日「ソ」開戦となる。</p> <p>現地応召者約一二〇〇名編入</p> <p>同日より同地警備</p> <p>して編成完結</p> <p>牡丹江省穆稜果穆稜において内地に転用した第一一師団の残置者を基幹として編成完結</p> <p>軍令陸甲才九号により編成下令</p>	
<p>歩兵第二六六連隊略歴</p> <p>通称号 満才八〇二部隊 真鶴才一二〇六三部隊</p>						概要	摘要

1872

至自											
	9	9	9		9	9	9	8	8	8	
	25	15	13		5	4	1	20	15	9	
連隊長 大佐 柏木 求馬	綏芬河經由入「ソ」		同地出發	才二八三	才二八二	崗崗才二八一作業大隊	崗崗飛行場に収容	南湖頭に集結同地において武装解除	鮮系は召集解除	停戦	日「ソ」開戦にともない全員鏡泊湖南方の陣地守備
				各作業大隊に編入							

					昭 20	年 月 日
8	7	5	5	3	1	
9	初	26	25	30	15	
<p>寧安残留隊は寧安出発</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>樺林の残留隊は寧安に移駐、同地付近の警備</p> <p>一部（約一五〇名）は樺林に残留し同地付近の警備</p> <p>主力は南湖頭に移駐、晒地構築</p> <p>在満応召兵の入隊</p> <p>同日より同地付近の警備</p> <p>地に転用した才一師団の残置者を基幹として編成完結</p> <p>牡丹江省寧安県樺林において才四団境守備才三地区隊よりの転入者と、内</p> <p>軍令陸甲才九号により編成下令</p>					<p>概 要</p>	
					<p>摘 要</p>	

歩兵第二六七連隊略歴

通称号

満才一二一部隊
真鶴才一二〇六四部隊

		自	至	自	至				
		9	99	9	9	9	8	8	8
		20	75	6	5	1	22	15	10
<p>連隊長 大佐 杉村南平</p>		<p>南湖頭着、連隊主力に合流、陣地守備 停戦 現地応召者の大部の者は在満居住地に向け自由行動となつたが、後日入 「ソ」したものが多し 主力は南湖頭において武装解除をうけ、行軍により蘭崗収容所に収容 蘭崗才二七八作業大隊（中尉高橋正尚） 蘭崗才二七九作業大隊（大尉飯田又蔵） }を編成 同地出発 綏芬河經由入「ソ」</p>							

						昭 20	年 月 日	第一二二師団挺進大隊略歴 通称号 真鶴才一三九二三部隊
8	8	8	8	8	7	7		
27	15	12	9	4	31	10		
陣地において武装解除						概要		摘要
停戦 鏡泊湖畔、南湖頭五〇八高地の陣地配備 日「ソ」開戦にともない東京城出發 同地の警備 寧安出發、同日東京城着 同日より同地の警備 完結 牡丹江省寧安縣寧安において才一二二師団各隊よりの抽出人員により編成 軍令陸甲才一〇六号により編成下令								

1876

	11	11	9	10	10	9	9	8
	11	2	末	31	29	9	1	31
	<p>北湖頭において田中少尉以下一ケ中隊は同地において主力より離れ残留 主力は東京城に移動 その主力は爾岡妹尾作業大隊に編入 同地出発 緩分河経由入「ソ」 一部は爾岡川崎作業大隊に編入後牡丹江に移動 牡丹江才一八作業大隊と改称同地出発 緩分河経由入「ソ」</p> <p>大隊長 少佐 齊藤喜一</p>							

					年月日	
				昭	20	
8	5	5	3	1		
9	22	20	30	16		
野砲兵第一二四連隊略歴						
通称号 満才六九〇部隊 真鶴才一二〇六五部隊						
概要						
<p>軍令陸甲才九号により編成下令 牡丹江市外興隆において才四國境守備砲兵隊よりの転入者を基幹とし、才三軍司令部砲兵教育隊（昭和十九年六月沖繩に転用された山砲兵才九連隊の残置者）と才三軍司令部輜重兵教育隊（昭和十九年六月沖繩に転用された輜重兵才九連隊の残置者）よりの編入者をもつて編成完結 同日より同池付近の警備 主力は鏡泊湖南岸地区の陣地構築のため興隆出発、南湖頭に移駐 一部は興隆に残留 現地応召兵の編入、興隆残留隊において教育訓練実施 日「ソ」開戦</p>						
摘要						

		9	9	9	9	9	9	8	8
		2	20	14	10	5	2	18	11
		<p>興隆残留隊も陣地において主力に合流し、糧秣資材の輸送、陣地守備 停戦命令受領 南湖頭において武装解除をうけ、北湖頭——東京城經由 蘭崗飛行場に果結 蘭崗才二八〇作業大隊に編入 同地出発 綏芬河經由入「ソ」 武装解除時現地応召者および一部のものは在滿の居住地に向かつて自由行動したものである。</p>							
		<p>連隊長 大佐 滝波 幸助</p>							

					昭和	
					20	1
					年月日	
6	5	5	5	3	16	1
下旬	22	13	1	30	16	1
<p>軍令陸甲才九号により編成下令 牡丹江省寧安県掖河において、才四国境守備工兵隊よりの転入者を基幹とし、その他在滿部隊よりの編入者をもつて編成完結。 同日より同地付近の警備 才三中隊長大尉石原 勇以下約一三〇名は陣地構築のため先発隊として南湖湖頭に移駐 主力は掖河出発、南湖頭付近において陣地構築 なお中尉山崎甚太郎以下約一五〇名は掖河に残留 在滿現役兵約二〇〇名入隊、掖河において教育 鮮系兵約二三〇名入隊のため、掖河の初年兵教育は石頭に移動して実施し、</p>					<p>工兵第一二二連隊略歴 通称号 満才三六一部隊 真鶴才一二〇六六部隊</p>	
					概要	摘要
					摘要	

昭										
20										
8	8	8	8	8		8	8	7	7	7
末	22	17	16	12		9	上旬	下旬	20	
<p>掖河残留隊では鮮系兵の教育、訓練を実施</p> <p>一部（江口軍曹以下約三〇名）は吉林省教化において陣地構築</p> <p>南雲軍曹を長として兵器資材の石頭移駐集積を開始</p> <p>石頭において教育中の初年兵は南湖頭の主力に合流</p> <p>掖河において教育中の鮮系兵は南湖頭の主力に合流</p> <p>残務整理のため鈴木 栄准尉以下約五〇名は掖河に残留</p> <p>日「ソ」開戦にともない寧安——温春地区・石頭——東寧間の橋梁爆破・莽</p> <p>交通遮断・石頭——南湖頭間の器材輸送および南湖頭付近の陣地構築等に</p> <p>従事</p> <p>掖河残留隊は石頭に移駐</p> <p>石頭より南湖頭の主力に合流</p> <p>停戦命令を受領し、南湖頭に集結を開始</p> <p>大部のものは南湖頭に集結完了</p> <p>現地入隊者・および鮮系兵は召集解除</p>										

至 自		至 自				
9	9	9	9	9	9	9
21	12	17	5	4	3	1
連隊長 少佐 波谷 勇 男		綏芬河經由入「ソ」		南湖頭において武装解除後同地出發 東京城着 東京城才二六二作業大隊 東京城才二六四作業大隊 東京城才二六六作業大隊 東京城才二六八作業大隊 東京城才二六九作業大隊 同地出發 に分散編入		

昭和20年						年月日	概要
6	5	4	3	1			
15	中旬	下旬	30	16		第一二二師団通信隊略歴 通称号 満才五〇四部隊 真鶴才一二〇六七部隊	
<p>軍令陸甲才九号により編成下令 牡丹江省寧安県掖河において、電信才四連隊、電信才一七連隊、歩兵才四三連隊・歩兵才四四連隊の各隊よりの転入者を基幹として編成完結 同日より同地付近の警備 主力は南湖頭に移駐 陣地構築の通信施設ならびに各部隊間の連絡 一部は掖河に残留 現地応召兵の編入 残留隊は寧安に移駐、同地の警備 一部は敦化、西沙河沿において勤務</p>						概要	
						摘要	

	11	11	11	10	9	9		8	8	8	8	8	8	8
	7	7	2	29	27	7		20	19	18	15	12	10	9
隊長 少佐 藤田 喜代馬	綏芬河經由入「ソ」	同地出発	同地出発	母校の一部は、蘭崗將校才2大隊に漏入	綏芬河經由入「ソ」	牡丹江（八達溝）收容所に移動	蘭崗中島作業大隊に漏入	武装解除をうけ、同地出発蘭崗收容所に收容	敦化にあつた一ヶ小隊は南湖頭の主力に合流	同地において武装解除	通信施設を撤去し、南湖頭に集結	停戦	寧安より南湖頭に再び転進	寧安地区整備のため南湖頭より寧安に転進

					年月日	概要	摘要
昭	20	3	4	5			
		1			16		
		30	1				
<p>軍令陸甲才九号により編成下令 牡丹江市において昭和十九年六月沖繩に転用した輜重兵才九連隊（満才四五三部隊）の残置者を才三軍司令部に名簿上入れ、この人員を基幹とし、在満の各部隊からの転属者をもつて編成完結 同日より同地の整備 鏡泊湖南側の陣地構築のため、才二中隊および才一中隊の一ヶ小隊は南湖頭に移駐 つぎのとおり各地に配備され、同地の整備、陣地構築資材、糧秣等の輸送</p> <p>本部…………… 東京城 才一中隊…………… 東京城——北湖頭</p>							

輜重兵第一二二連隊略歴

通称号

満才四五三部隊

真鶴才一二〇六八部隊

8	8	8	8	8	8	7	5	5	5	5
24	15	13	12	9	4	25	下旬	中旬	下旬	中旬
<p> 才二中隊 …… 南湖頭 才三中隊 才四中隊 …… } 東京城 才五中隊 } 北湖頭 残留隊 …… 牡丹江 現地応召、入隊者約二〇〇名編入 一部（才二中隊の一ヶ小隊約五〇名）は吉林省敦化に派遣 一部は寧安県大溝に移駐陣地構築 残留隊は牡丹江市外の興隆に移駐 日「ソ」開戦 残留隊は興隆出發 東京城の本部に合流し東京城北湖頭間の陣地資材、糧秣の輸送 停戦 職系兵は召集解除 </p>										

至自 至自														
8	8	10	10	10	8	8	10	10	10	10	9	9	9	8
19	18	17	13	12	25	23	31	29	29	26	9	7	2	27
<p>部隊長以下一部は東京城において武装解除 並力は南湖頭に集結し同地において武装解除 崗岡収容所において部隊長主力に合流 崗岡妹尾、中島各作業大隊に編入 同地出発 綏芬河經由入「ソ」 一部敦化にあつたものは、主力に合流できず吉林省沙河沿において武装解除 敦化収容所に収容 敦化才二三九作業大隊（中尉柴山 茂）に編入 同地出発 満洲里經由入「ソ」 一部大溝陣地にあつたものは、敦化に向かつて南下 吉林省官地着、武装解除</p>														

		10	10	9
		9	4	1
				8
		9	4	1
		20		
		敦化収容所に収容	敦化才二四四作業大隊（少尉大島清）に編入	
		同地出発		
		綏芬河経由入「ソ」		
		連隊長		
		少佐		
		田中剛一		

						昭 20	年 月 日	第一二二師団兵器勤務隊略歴
8	8	8	8	4	3	1		
25	15	10	9	15	30	16	概要	
<p>軍令陸甲才九号により編成下令</p> <p>牡丹江市において戦車才一師団、才一六野戦兵器廠、才二〇野戦兵器廠および其の他各隊よりの転入者一二三名をもつて編成完結</p> <p>同日より同地の整備および兵器の修理、補強業務</p> <p>主力は陣地構築のため、南湖頭に移駐</p> <p>一部は牡丹江に残留、同地の整備</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>牡丹江残留隊は全員南湖頭の主力に合流し陣地守備</p> <p>停戦</p> <p>残置兵器の処理、整理をし南湖頭において武装解除</p>								
							摘要	

1889

	11	11	9	9	9	9
	11	2	末	20	10	3
	<p>隊長 中尉 兼田 達郎</p> <p>東京城に移動</p> <p>一部（病弱者三八名）は入「ソ」することなく南湖頭および北湖頭において兵器整理のため部隊より離れ以後不明</p> <p>東京城より隅崗に移動</p> <p>隅崗川崎作業大隊に編入、牡丹江に移動</p> <p>牡丹江才一八作業大隊と改称、同地出發</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p>					

昭和20						年月日	第一二二師団病馬廠略歴
8	8	8	8	5	3		
1	30	10	9	初旬	30	16	通称号 満才六〇部隊 真鶴才一二〇七〇部隊
<p>軍令陸甲才九号により編成下令 牡丹江省寧安県掖河において才三軍司令部、其の他才三軍隷下部隊の各隊よりの転入者を基幹として一一三名をもつて編成完結 同地において病馬の診療ならびに収容 主力は鏡泊湖付近の陣地構築のため、南湖頭に移駐 一部は掖河に残留、病馬の診療ならびに収容 日「ソ」開戦にともない主力は鏡泊湖高嶺に集結し陣地守備 掖河残留隊は主力に合流 陣地において武装解除 同地出発</p>						概要	
						摘要	

1891

	11	11	11	10	10	10	9	9
	6	6	2	29	26	1	5	5
獣医大尉 木下昇	廠長	綏芬河經由入「ソ」	同地出発	將校は牡丹江將校才二大隊に編入	綏芬河經由入「ソ」	同地出発	八達溝才六作業大隊に編入替	下士官兵は蘭崗中島作業大隊に編入
							將校、下士官兵に区分される	蘭崗収容所に収容

						昭和		年月日	第一三四師団司令部略歴	
						7	7			
9	9	8	8	8		30	10			
									通称号 満第六六七部隊 勾玉第二五二六三部隊	
師団長 中将 井 関 扱						軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 三江省樺川県佳木斯において編成完結。 独立混成第七八旅団司令部と富錦駐屯隊司令部（佳木斯師団司令部と仮称）を 改編。 同日より同地付近において警備 主力は改編前より方正県において陣地構築（桜演習と呼称） 日「ソ」開戦により師団全員に方正集結を命令各部はそれぞれ駐屯地出発。 方正県方正に集結。 方正において武装解除。 主力は佳木斯斉藤作業大隊（少佐斉藤一郎）に編入。 佳木斯出発（船により松花江下る） 入「ソ」。		略 歴		
									摘要	

1893

					昭 20		年 月 日	略 歴
8	9	8	8	8	7	7		
18	15	25	13	9	30	10		
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 三江省樺川県佳木斯において編成完結。 独立歩兵第五七三大隊 “ ” 五七六大隊 “ ” 五七七大隊 を合併し (佳木斯師団歩兵連隊と仮称) 改編 主力は方正県草皮溝において陣地構築 (桜演習と呼称) 佳木斯残留隊は同地の警備 日「ソ」開戦により、各駐屯地を出発。 主力は方正に集結。 主力は方正において武装解除。 佳木斯着。 一部は依蘭県依蘭において武装解除。</p>								略 歴
								摘 要

1894

	9	9	8
	19	17	30
<p> 迎隊長 中佐 岩田 勝 清 </p>	<p> 入「ソ」。 下る)。 </p>	<p> 主力は佳木斯阿部作業大隊（大尉阿部三郎）に編入佳木斯出發（船により松江 </p>	<p> 佳木斯着。 夜 </p>

1895

					昭 20		年 月 日	略 歴
					7	7		
9	8	8	8	8	30	10		
28	14	20	15	9			<p>歩兵第三六六連隊略歴</p> <p>通称号 濶第七二八部隊 勾玉第二五二六五部隊</p>	
<p>主力は佳木斯馬場作業大隊（中尉馬場義信）に編入。</p> <p>南又において武装解除。</p> <p>一部は鶴岡山発して方正に向う。</p> <p>方正において武装解除。</p> <p>主力は方正県方正に集結。</p> <p>日ソ開戦により各駐屯地出発。</p> <p>佳木斯残留隊は同地の警備</p> <p>（桜演習と呼称）</p> <p>主力は方正県大平山一部は鶴立県鶴岡において陣地構築</p> <p>（佳木斯師団歩兵隊と仮称）改編。</p> <p>第一四国境守備隊歩兵隊を合併し</p> <p>独立歩兵第五七四大隊</p> <p>三江省桦川県佳木斯において編成完結。</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。</p>								
							摘要	

1896

	9	9
	3	1
	入「ソ」。	佳木斯出發（船により松花江下る）
連隊長		
中佐		
石山		
年秀		

1897

昭 20			年 月 日		略 歴	摘 要
8	8	8	7	7		
12	20	9	30	10		
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 三江省樺川県佳木斯において編成完結。 独立歩兵第二六六大隊 独立歩兵第二六七大隊 独立歩兵第二六八大隊 を合併し（佳木斯師団歩兵隊と仮称）改編。 主力は依蘭県大羅勒密付近および方正県方正付近において陣地構築。 （桜演習と呼称） 一部は富錦、撫遠より中央鎮に至る黒龍江沿岸に各監視隊配置。 佳木斯残留隊は同地の警備。 日ソ開戦により各駐屯地出發方正に向う。 富錦に駐屯した部隊は途中「ソ」軍の攻撃をうけ主力は牡丹江^省「ヤプロニ」に到着。 主力は方正に集結。 各監視隊は各駐屯地出發途中「ソ」軍の攻撃をうけ。</p>						

1898

20692
26098

	10	10	9	9	9	9	8	8
	8	1	20	13	11	5	20	18
連隊長 大佐 東野 謹 三	<p>その主力は方正に集結。 一部は「ヤプロニー」に到着。 主力は方正において武装解除。 佳木斯大家作業大隊等（中尉 大家賢）に編入。 佳木斯出発（船により松花江下る）。 入「ソ」。</p> <p>「ヤプロニー」で武装解除を受けたものは海林第一四七作業大隊（中尉高橋安治）に編入。 海林出発。 綏芬河經由入「ソ」。</p>							

至自		昭 20	年 月 日	略 歴	摘要
9	9 9 9	8			
中旬	14 30 4	14	9 7 25	12	30 10
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 三江省樺川県佳木斯において編成完結。 富錦駐屯隊および独立混成第七八旅団を基幹として編成。 同地付近の警備および陣地構築。 一部先発隊として佳木斯出發。 依蘭において武装解除。 佳木斯北林^村作業隊（大尉北村実治）に編入。 佳木斯出發（船により松花江下る） 入「ソ」。</p> <p>主力は各中隊毎に佳木斯を出發し途中「ソ」軍と遭遇して更に小行動群に分散して敦化、吉林、上金馬、五常等に向つて行動した。 各地の部隊に合流武装解除。 主力は佳木斯石崎作業大尉（大尉石崎進）に編入。 佳木斯出發入「ソ」（船により松花江下る）。</p>					

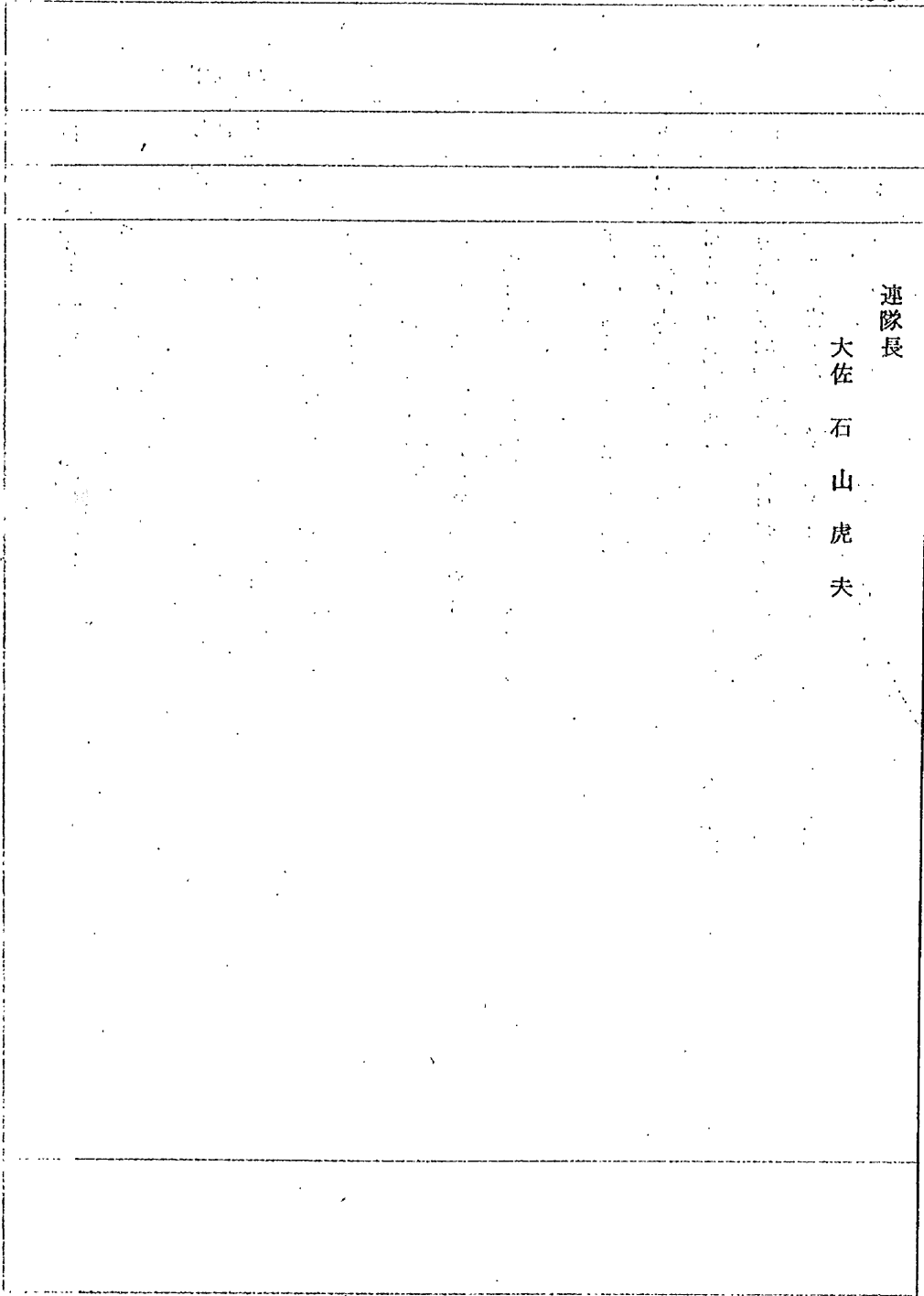
第一三四師団挺進大隊略歴

通称号 勾玉第二五二六七八部隊 鋭第一三〇八二部隊

1900

				昭 20		年 月 日	略 歴
8	8	8	8	7	7		
25	23	20	13	30	10		野砲兵第一三四連隊略歴 通称号 満第八二四部隊 勾玉第二五二六九部隊
<p>同日佳木斯出発（船により松花江下る）。</p> <p>入「ソ」。</p>				<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。</p> <p>三江省樺川県佳木斯において編成完結。</p> <p>富錦駐屯砲兵隊</p> <p>独立混成第七八旅団砲兵隊 を合併し</p> <p>（佳木斯師団砲兵隊と仮称）改編。</p> <p>主力は依蘭県大羅勒密において陣地構築 （桜濱隊と呼称）</p> <p>佳木斯残留隊は同地の警備。</p> <p>主力は大羅勒密出発。</p> <p>同日方正着、同時に佳木斯残留隊を同地において掌握。</p> <p>方正南方四軒守義屯において武装解除。</p> <p>主力は佳木斯渡辺作業大隊（少佐渡辺俊三）に編入。</p>			
							摘要

1902



連隊長

大佐
石山
虎夫

1903

		昭 20	年		
		7	月		
		30	日		
8		7		<p style="text-align: center;">工兵第一三四連隊略歴</p> <p style="text-align: center;">通称号 満第七三三部隊 勾玉第二五二七〇部隊</p> <p style="text-align: center;">略 歴</p>	
10		10			
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 三江省樺川県佳木斯において編成完結。 富錦駐屯工兵隊と独立混成第七八 旅団工兵隊を合併し（佳木斯師団工兵連隊と仮称）改編。 主力は次のとおり方正県各地において陣地構築。 （桜演習と呼称）</p> <p>本部・・・小羅留密陣地構築 一中・・・佳木斯駐屯地警備 一部は大羅留密陣地構築 二中・・・大平山陣地構築 三中・・・草坡溝陣地構築 器小・・・大羅留密陣地構築 佳木斯残留隊は同地付近の警備。 主力は各駐屯地出發、依蘭に到着。</p>					
				摘要	

1904

					昭 20		年 月 日	略 歴
9	8	8	8	8	7	7		
1	30	24	15	9	30	10		
<p>第一三四師団通信隊略歴</p> <p>通称号 満第九一部隊 濶第四四五部隊 勾玉第二五二七部隊</p>								
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 三江省樺川県佳木斯において編成完結。 独立混成第七八旅団通信隊（佳木斯師団通信隊と仮称）を改編。 同日より同地附近の警備。 主力は方正県東北地区 一部は通河県東北地区 （桜演習と呼称） において陣地構築 開戦とともに各駐屯地を出発。 方正において停戦。 方正において武装解除。 主力は佳木斯平野内作業大隊（大尉平野内為輔）に編入。同日佳木斯出発 （船により松花江下る）。 入「ソ」。</p>								
<p>隊長 大尉 石 森 善 数</p>								
							摘 要	

1906

輜重兵第一三四連隊略歴									
通称号 満第九七三部隊 勾玉第二五二七二部隊									
略 歴									
年 月 日									
昭 20									
9	8	10	8	8	8	8	8	7	7
3	25	23	30	17	16	10	9	30	10
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 三江省樺川県佳木斯において編成完結。 独立混成第七八旅団軽重隊（佳木斯師団軽重隊と仮称）を改編。 同日より同地付近の警備。 主力は三江省龍崗県大羅勒密付近において陣地構築（桜演習と呼称）。 一部は通河において警備。 佳木斯残留隊は同地出発、同日大羅勒密着。 主力は各駐屯地出発。 方正に集結。 一部は哈爾濱着、八月二十二日同地において武装解除し、 海林第一四〇作業大隊に編入 海林出発、同日綏芬河經由入「ソ」。 主力は方正において武装解除。 方正出発佳木斯着。</p>									
摘 要									

1907

	9	9	9
	18	15	15
連隊長 少佐 森本 国治	入「ソ」。	佳木斯出發（船により松花江下る）。	同地森本作業大隊（少佐森本国治）編入。

1908

										昭和		年月日	略	歴	摘要	
										7	7					
9	9	9	9	8	8	8					7	7				
12	10	4	3	20	13	9					30	10				
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 三江省樺川県佳木斯において編成完結。 独立混成第七八旅団兵器修理班 (佳木斯師団兵器修理班と仮称) を改編。 主力は方正県方正付近において陣地構築。 (桜演習と呼称) 佳木斯残留隊は同地の警備。 日ノ開戦とともに各駐屯地出発。 主力は方正着。 方正において武装解除。 佳木斯着。 佳木斯橋本作業大隊(大尉橋本卯作)に編入。 佳木斯出発(船により松花江を下る)。 入「ソ」。</p>																

1909

	10	8
	23	18
<p>隊長 大尉 太田今朝治</p>	<p>海林第一四〇作業大隊（中尉山田弘）に編入。 綏芬河経由入「ソ」。</p>	

1910

昭和20年		略	歴	摘要
年	月			
日	日			
7	7			
7	7			
30	10			
12	8			
19	8			
20	8			
10	9			
11	9			
13	9			

通称号 勾玉第二五二七七部隊
 第一三四師団病馬廠略歴
 軍令陸甲第一〇六号により編成下令。
 三江省樺川県佳木斯において編成完結。
 (佳木斯師団病馬廠と仮称)を改編。
 同地において整備。
 佳木斯出発。
 主力は方正着。
 方正において武装解除。
 佳木斯杉山作業大隊(中尉 杉山実三)に編入。
 佳木斯出発(船により松花江下る)。
 入「ソ」。
 廠長
 獣医中尉 塚田 晴夫

1911

									昭	年
									20	
									7	月
									10	日
10	10	9	8	8	8	8	8	8	7	略
8	7	1	25	22	15	9	1	10	10	略
<p>通称号 不屈第三七三〇一部隊</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令 吉林省、敦化において編成完結 爾後敦化付近の警備 日「ソ」開戦により「ソ」軍の米襲を予想し、極力戦力の増強に務め、転戦し 得る状況において待機 停戦 敦化において武装解除 同地において准士官以上と下士官以下に区分され、以後次のとおり行動した。 下士官以下は、敦化第二四二作業大隊（武装解除後一応第二三九作業大隊に編 入したが、上記の大隊に編入変えになつた）に編入 敦化出發 満洲里經由入「ソ」</p>										
										摘要

第一三九師団司令部略歴

1912

	11	10	9
	3	15	
	<p>准士官以上は、将校大隊に編入後、沙河沿飛行場に移動 牡丹江省、掖河に移動 掖河より列車により出発、綏芬河經由入「ソ」</p> <p>師団長 中将 富永恭次</p>		

1913